

一九八九年の世界の相場企業の株式時価総額上位二〇社には一位のNTTを筆頭に一四社の日本企業が登場していた。三四年が経過した現在、日本企業は上位二〇社どころか五〇社にも皆無である。相場すれば株式時価総額が一〇億ドルを突破するユニコーン企業についても、日本には全体の一％に相当する二社しか存在しない。

スイスのシンクタンクが世界の六三カ国を対象に、情報通信分野の国力を評価した推計があるが、日本は二九位で、アジアだけでもシンガポール、韓国、香港、中国などが上位にある。日本が強力すぎてジャパン・バッシングの逆風の時代は過去のものとなり、ジャパン・ナッシングの時代の到来が数字でも証明されている。

しかし視点を変更すると、日本の産業の底力が浮上してくる。グローバル・ニッチ・トップと名付けられる企業で、大半は相場もせずユニコーン企業のように巨大でもない企業である。しかし特定の部品や製品で世界市場の大部を占有し、一般には無名であるものの業界では著名な企業が多数存在する。以下に数例を紹介する。

自動車や旅客機のフロントガラスには雨滴を除去するワイパーが装備されているが、ガラスに接触するゴムの部分は埼玉県上尾市に本社のある「フコク」が年間二億本以上を生産し、国内の九〇％、海外の五〇％を占有している。

自動車のゴムタイヤのチューブには空気を注入するバルブが装着されている。岐阜県大垣市にある「太平洋工業」は自動車がまだ普及していない戦前から生産を開始し、国内では一〇〇％、海外では五〇％を供給している。

かつて自動ドアは足元の圧力センサーで人間の接近を感知して開閉していたが、天井に設置した遠赤外線センサーで感知する装置を開発した滋賀県大津市の「オプテックス」の製品は世界の三〇％を供給している。

透明なセロハンは石油製品ではなく木材パルプを原料とする生分解性のある素材である。一九五五年から生産を開始し、国内では七〇％以上、世界では五〇％以上を生産しているのが名古屋市にある「フタムラ化学」である。

ペットボトルといわれるプラスチック容器は世界で年間六〇〇億本が消費されているが、それらを一台で製造できる装置の世界の五〇％を供給しているのが長野県小諸市にある「日精エー・エス・ピー機械」である。

急峻な斜面で育成されているミカンなどの果物を道路まで運搬する小型のモノレールがある。これを最初に開発した岡山市にある「ニツカリ」は農業だけではなく土砂運搬にも提供し、世界市場の五〇％以上を占有している。

自動車は三万点、航空機は三〇〇万点の部品で構築されるが、それ以外の工業製品も多数の部品の集積である。我々は最終製品を生産し販売している会社の名前は承知しているが、それら多数の部品を供給している会社については無知である。しかし、上記に紹介したような中小企業が日本の産業を支えているのである。

製造業では従業員三〇〇人以下か資本金三億円以下の会社が中小企業と定義されるが、日本では企業数の九九・七％が該当する。生物の世界は土中や水中の大量の微生物を土台にして大型の生物にまで到達する。ピラミッドにより構成されているが、産業社会も今回紹介したような企業が土台を維持していることを銘記すべきである。